



TITLE:

奇形歯の形態病理学的研究とくに
上顎切歯多歯根症について(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

吉田, 厚雄

CITATION:

吉田, 厚雄. 奇形歯の形態病理学的研究とくに上顎切歯多歯根症について. 京都大学, 1962, 医学博士

ISSUE DATE:

1962-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/210859>

RIGHT:

氏 名	吉 田 厚 雄 よし だ あつ お
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 2 0 号
学位授与の日付	昭 和 37 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	奇形歯の形態病理学的研究 とくに上顎切歯多歯根症について
論文調査委員	(主 査) 教 授 鈴 江 懷 教 授 岡 本 耕 造 教 授 美 濃 口 玄

論 文 内 容 の 要 旨

奇形歯、とくに歯根奇形には歯根の形そのものの異常のほかに、歯根の数の異常がある。すなわち、人の歯では各歯種に応じて一定の歯根数が認容されているが、それが過剰に出現する場合、それを多歯根症と呼んでいる。ところが、その発生原因については未だ明確な説はなく、また多数のこの種の歯を研究材料とした詳細な研究業績も見当らない現状である。

そこで、著者は長年にわたり蒐集された教室所蔵の多数の多根性上顎切歯について綿密な肉眼的観察とともに、レントゲンのならびに歯髓腔内墨汁浸潤歯牙透明法による髓腔形態の観察を行ない、多歯根症の実態把握と成因の究明に努め、形態学的にはもちろんのこと、臨床上にも裨益するところがあると思われる若干の知見を収めることができた。

次にその成績の概要を列記すると、

1) 2根性上顎中、側切歯の各部の計測値と重量は標準(平均)値を下回るものが多く、総じてその発育は劣っていた。

2) 根の分岐方向は近遠心的、唇舌的ならびに附加的の3種類に大別されるが、歯の近遠心的および唇舌的分岐はきわめて少なく、厳密には、上顎中切歯では、唇側近心部における分岐が多く、2根性化傾向の上顎中切歯でも、著明な発育溝(分岐溝)は唇側と近心側に多く現われ、上顎中切歯における根分岐素質が唇側近心隅角部に在ることがうかがわれた。上顎側切歯では舌側近心ならびに舌側遠心における分岐が多く、2根性化傾向の上顎側切歯でも発育溝は舌側に多発し、上顎側切歯においては、根分岐の傾向が舌側において著明なことが判明した。

3) 3根性上顎側切歯の1例では、根分岐性状はあたかも3根性上顎小臼歯様で、上顎大臼歯にも共通点を見いだすことができる。

4) 根の分岐は根の中央付近が大部分を占め、分岐各根の発育程度は総じて近心根と遠心根との間には差異が少なく、唇側根は舌側根よりすぐれるものが多い。

5) 歯冠各部の発育は唇面において幽微、舌面において普通のもが多く、歯頸線彎曲が上顎中切歯では唇面で、上顎側切歯では舌面において2弧線よりなる波濤状のもが多くみられ、根分岐に随伴する特異的な所見として注目すべきものであった。

6) 歯冠、歯根ともその表面性状は総じて佳良でエナメル質減形成の発現はほとんどみとめられなかった。

7) 歯髓腔の形態はレ線像では不分明なものが多かったが、歯髓腔内墨汁浸潤歯牙透明法で、その所見を詳細に観察することができたのは誠に有意義であった。そして、2根性上顎切歯には、(a)2根性下顎犬歯または第1小臼歯様根管を呈するもの、(b)副根管が主根管の側枝状をなすもの、(c)不完全分岐歯根にみられる根管の複雑化を示すものの3種類の髓腔形態がみとめられ、aは唇舌的分岐例に多く、bは附加的分岐例に多いことが判明した。

8) 上顎切歯多歯根症の成因については、系統発生学的に復古形としての見方のほかに、歯胚と顎骨の発育との関係を重視すべきであると考ええる。そして本研究の結果から多根性上顎切歯自体は、正常歯に比較し劣形成であることが理解できるのである。

論文審査の結果の要旨

奇形歯とくに多歯根症については、その発生原因として未だ明確な定説はなく、また多数のこの種の歯牙を研究材料とした詳細な研究業績も見当らない。そこで、著者は長年にわたり蒐集された多数の多根性上顎切歯について綿密な観察を行ない、多歯根症の実態把握と成因の究明に努め、興味ある知見を収めた。その成績はおよそ次のごとくである。

まず、2根性上顎中、側切歯は総じてその発育が劣っていた。そうして、2根性化傾向の上顎中切歯では著明な発育溝は唇側と近心側に多くあらわれ、上顎中切歯における根分岐素質が唇側近心隅角部に在ることがうかがわれ、また2根性化傾向の上顎側切歯でも発育溝は舌側に多発し、上顎側切歯においては、根分岐の傾向が舌側において著明であることを認めた。

根の分岐は根の中央部附近が大部分を占め、分岐各根の発育程度は総じて近心根と遠心根との間には差異が少なく唇側根は舌側根よりすぐれるものが多い。歯冠各部の発育は唇面において幽微、舌面において普通のもが多く、歯頸線彎曲が上顎中切歯では唇面で、上顎側切歯では舌面において2弧線よりなる波濤状のもが多く、根分岐に随伴する特異的な所見として注目すべきものであると考えた。

その他歯根、歯冠、歯髓腔などについても種々検討を加え、従来きわめて知見に乏しかった上顎切歯多歯根症につき、豊富な材料を駆使して有益な興味ある成績を収め得たのであって、医学博士の学位論文として価値あるものと認める。